

埋文センターニュース

第 15 号

2002. 3. 29

津市埋蔵文化財センター



市役所 1 階 文化財ロビー展

埋蔵文化財センターは地域の先生！ ～埋蔵文化財センターとの関わりを通して～

津市立安東小学校 6年担任 深見 和正

安東小学校では、平成12年度から埋蔵文化財センターの皆さんにお願いして、6年生を対象に埋蔵文化財出張講座を開いていただいています。

出張講座では「生きた教材」を学習に取り入れたり子供たちの体験活動を大切にしてくださいなど、子供たちが歴史に興味を持つためのきめ細やかな工夫がたくさんしてありました。校区の遺跡である^{しごみ}洪見城址の今と昔をスライドで見せていただいたり、^{のうも}納所遺跡から出土した土器を手をさせていただいたことにより、地域の歴史学習への大きな興味付けとなったように思います。講座中、子供たちが目を輝かせて学習に取り組んでいる姿が印象的でした。地域にある歴史的な遺産・遺物への興味がわき、「総合的な学習」における調べ学習へと発展させることができました。

出張講座を機に、子供たちは学芸員の先生方と親しくなりました。埋蔵文化財センターが校区内にあり子供たちが訪問して気軽に教えていただけることから、子供たちはよく埋蔵文化財センターを訪問するようになりました。埋蔵文化財センターが自分の家の目の前という子や学芸員の中村さんや米山さんからいろいろなお話をお聞きするのを楽しみに出かけた子もいます。

昨年度6年生で「地域に残る古いもの紹介」のビデオ作りに取り組みました。遺跡や道標などは中村さんや米山さんに教えていただいたり、ビデオにも助言者として登場していただいたり

して、内容の濃いビデオが完成しました。

本年度、安東小学校の5・6年生が「総合的な学習」で地域に残る文化財や遺跡・産業などを調べました。歴史グループの子供たちは埋蔵文化財センターに足を運んだり、中村さんに安東小学校へ来ていただいたりしてたくさんのことを教えていただきました。なかでも遺跡班の子供たちは、積極的に地域に残る遺跡を調べました。調べていく中で、津市の遺跡の中でも大きな遺跡である納所遺跡について調べ学習を深めていくことになりました。調べ学習が一段落した後、子供たちから「納所遺跡から出土した土器を作りたい」という話が出て、夏休みに中村さんをお招きし「土器作り」に挑戦することになりました。野焼き用粘土を使って納所遺跡から出土した本物の土器を見ながら、子供たちが想像した個性豊かな土器が出来上がりました。出来上がった土器は数日乾かし、中村さんに指導していただき野焼きを行いました。半日かけて焼き、素晴らしい土器を完成させることができました。完成した土器を手にした子供たちの顔は大変満足げでした。

2学期には^{しごみ}洪見城班が「^{しごみ}洪見城の模型作り」に挑戦しました。模型作りにあたり、直接発掘調査を担当された中村さんから発掘当時の航空写真や図面を見せていただき、はっきりと分からない部分は子供たちの想像により復元していきました。土台には紙粘土を使い、櫓などはマッチ



土器作り



洪見城の模型作り

箱や割り箸を使い、色を塗って仕上げました。

10月26日（金）に行われた安東小学校研究発表会では、中村さんを歴史グループのゲストティーチャーとしてお招きしました。歴史グループでは、遺跡班と渋見城班をはじめ多くの班が中村さんとの関わりが深いので、各班の発表の後に中村さんから地域の遺跡や遺産についてのお話をさせていただきました。

このようにして、今年度安東小学校では地域

にある埋蔵文化財センターの皆さんの協力をいただき、「総合的な学習」をすすめてきました。子供たちが地域の歴史に興味を示し、子供たちが調べ学習をする上で大きな力となっていた。埋蔵文化財センターの皆さんには本当に感謝しております。これからも埋蔵文化財出張講座にたくさんの学校が参加され、歴史学習や「総合的な学習」に埋蔵文化財センターを積極的に活用されることをおすすめいたします。

安濃津をゆく その② 安濃川流域の遺跡

津市の西側に接する芸濃町錫杖ヶ岳付近に源を発する安濃川は、安濃町・津市を流れて伊勢湾に注ぎ、その中下流域には南北の低丘陵に挟まれた細長い沖積地を形成しています。

安濃川の下流域にあたる津市内では、近年の国道バイパス建設などに伴う大規模な発掘調査の進展によって、沖積地に営まれた遺跡の詳しい様子が分かるようになりました。

今回は、安濃川に沿っていにしへの遺跡を訪ねます。



遺跡分布図

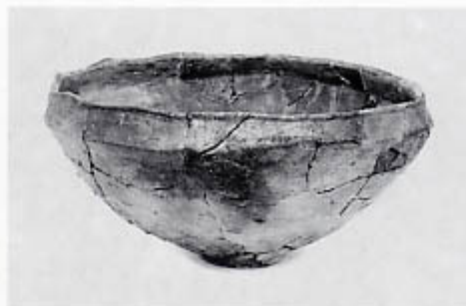
流域のあけほ

安濃川の沖積地で確認された遺跡のうち、現在最も古い時期に相当するのが、蔵田遺跡で見つかった縄文時代中期～後期にかけての土器です。写真の深鉢は後期末（約3,000年前）のもので、一個体分がまとまって出土した状況から、こどものお墓（棺）として使われていた可能性が指摘されています。

やや時期の下がった晩期になると、安濃町の多倉田遺跡や辻の内遺跡で遺物がみられ、市内の松ノ木遺跡では炭化物を伴った堅穴住居が確認され、突帯文を有する深鉢に加えて浅鉢が出土して、この時期に流域低地部での居住が始まったと考えられます。近辺で同時期の遺物の出土が確認された納所遺跡では、西日本を中心に分布する突帯文土器に加え、東日本の浮線網状文土器を含んでいます。こうした土器の混在は当時の地域間交流を示すとともに、文化圏の接点としての地域的な特徴を表していると言えるでしょう。



蔵田遺跡 深鉢 ※



松ノ木遺跡 浅鉢 ※



納所遺跡 浮線網状文土器 ※

弥生のくらし

この地域の弥生時代を語るときにまず挙げられるのが納所遺跡です。弥生文化が津市内に定着した最初の地とも言われ、弥生時代の全期間を通じて遺構や遺物が確認され、環濠とも考えられる溝の廻る様子はこの地域の拠点集落に相応しい規模と内容を誇っています。円形や長方形・方形と様々な平面プランを持つ竪穴住居をはじめ、土坑墓・方形周溝墓などの墓、土器や石器・木器などの道具類は相



弐ノ坪遺跡 焼失住居 ※



納所遺跡 土坑墓 ※



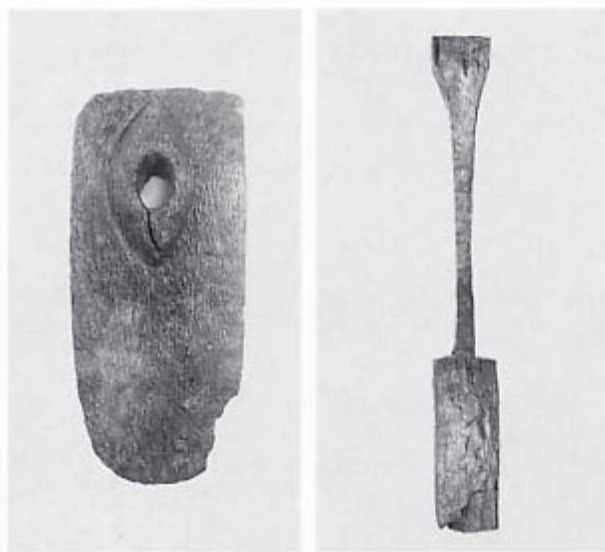
蔵田遺跡 井堰

当な数の出土が知られます。中でも、出土した石器や木器には、完成前の未製品や製作時に出るチップ類も多く、納所遺跡が木器や石器の工房としての働きを持っていたことも指摘されています。

納所遺跡が全盛を迎える弥生時代中期、安濃川を挟んだ対岸の替田遺跡や弐ノ坪遺跡でも集落が営まれます。中でも、弐ノ坪遺跡で見つかった竪穴住居址は火事で焼け落ちた様子が良く分かり、円形の住居の一部に入口と考えられる小さな張出部を持っています。

弥生文化の特徴の一つとして挙げられるのが稲作です。日本での稲作開始は縄文時代まで遡ると言われますが、県内の遺跡で明確な形で稲作の様子が確認されたのが森山東遺跡です。小区画水田の様子は次章で詳述しますが、弥生後期には更に大規模な水田耕作が営まれていたことを示す遺構が見つかっていました。それが蔵田遺跡の井堰（灌漑用のダム）で、6 m余りの川幅に横木を渡し、板状の杭を何重かに打ち込んで流れをせき止めて水位を上げ、東側に導水していたと考えられ、井堰の左側半分は杭の残った状況は、水量を杭の加減で調整していたことを示しています。

これら稲作関連の遺構は、現在も流域低地部に多く埋没しているものと思われ、今後の調査でより明らかになっていくことでしょう。



納所遺跡 木製鋤 ※

木製鋤 (未製品) ※

古代の大区画整理

安濃川兩岸の水田には、かつての条里制^{じょうりせい}の名残と考えられる土地区画がよく残っていました。条里制とは、古代の耕地の区画法で、耕地を縦横に区画することで方形に整え、各区画を国・郡ごとに「条・里・坪」を付与して場所の指示を明確にしたといわれます。

昭和42年以降に行われた圃場整備^{ほじょうせいび}によってその姿をほとんど消しましたが、発掘調査では条里制に関連する遺構が見つかっています。森山東遺跡と蔵田遺跡では東西方向の条里溝と坪界溝があり、平田遺跡や式ノ坪遺跡では条里方向に規制された掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}が確認されました。これらは平安時代以降のものですが流域に条里制が施行される時期を考える上でも大きなヒントになるものです。

モノと文化の来た道

発掘調査で出土する遺物には、土器や石器、そして木器などの生活道具のほかに、当時の人々の文化レベルを示すものも見つかります。位田遺跡^{いんでん}では24個もの碁石がまとまって出土し、都から離れたこの地方でも風流な遊びが行われていたことが窺^{うかが}えます。こうした文化の往来を支える具体的な遺構として最近、道の発見が相

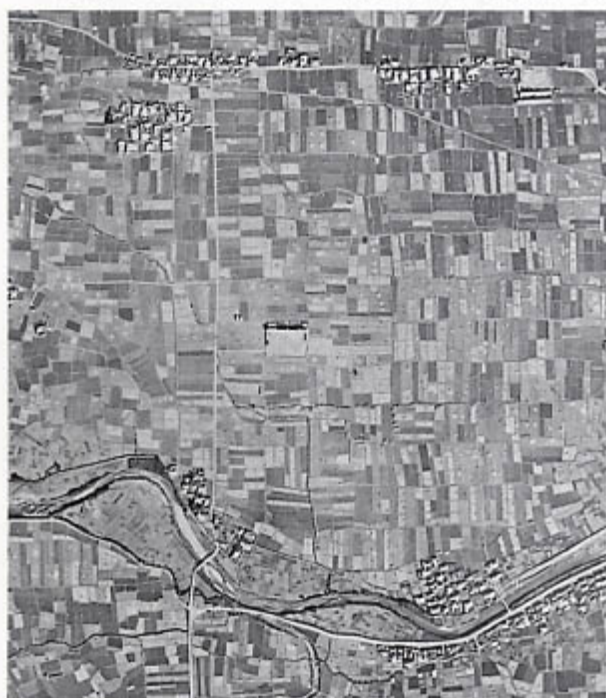
次いでいます。位田遺跡^{いんでん}や梁瀬遺跡^{やなせ}などで両側に溝を持った道路遺構が確認されています。また、陸上交通だけでなく、河川を利用した流通も見逃せません。里前遺跡^{さとまえ}では大量の山茶碗が出土し、岩田川を介した位置関係から、中世港湾都市として流通拠点となった安濃津との関わりが指摘されます。（中村光司）

※ 三重県埋蔵文化財センター提供
※※ 1952年米軍撮影空中写真を使用



位田遺跡 碁石出土状況

※



圃場整備前の蔵田遺跡周辺（上が北）

※※



里前遺跡 墨書山茶碗

※

遺跡紹介⑭

森山東遺跡

森山東遺跡は安濃川の支流、美濃屋川の南岸に立地する遺跡です。現況は水田で、かつて西方にあった比高差5mほどの丘陵の裾が東方へ緩やかに広がる部分にあたります。昭和63年と平成元年に、一般国道23号中勢バイパスの建設にともなって発掘調査が行われ、弥生時代から中世の遺跡であることが明らかになりました。

森山東遺跡の調査で注目を集めたのは、県内で初めて弥生時代の水田が確認されたことです。県内ではこれまでに、上野市北堀池遺跡で古墳時代の水田が確認されていましたが、弥生時代の水田が確認された例はなく、納所遺跡の調査でも水田の存在する可能性が指摘されているだけでした。

確認された水田は、全体に南および東に緩やかに傾斜しており、中勢バイパスの路線内だけでも約4,000㎡の広がりがありました。弥生時代の水田といえば、静岡県登呂遺跡で確認されたような大規模なものがイメージされがちですが、森山東遺跡の水田は一辺3～

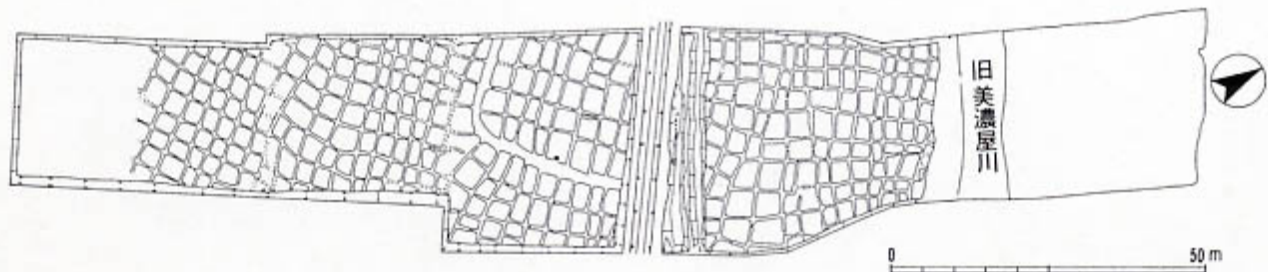


水田遺構（西から）写真提供：三重県埋蔵文化財センター

4m前後の小さなもので、一般に小区画水田とよばれています。隣り合う田面の高低差はせいぜい5cm内外におさめられており、自然地形を巧みに利用した、土量をあまり動かさなくても良い省力化された土木工事が行われたものと考えられます。遺構検出の際、東西方向の畦畔が南北方向の畦畔より明瞭に確認されていることから、東西方向の畦畔が先に造られたものと考えられています。標高の高い調査区の西方に何らかの灌漑施設があり、そこから給水した水が上段の水田から下段の水田へ導かれたものと推定され、その状況は現在の谷水田の灌漑方法とほとんど変わりがないように思えます。

このほか、森山東遺跡の水田では、わずかながら人間の足跡や木製農耕具によるものと考えられる耕作痕も確認されています。足跡のなかには連続しているものもいくつかあり、その歩幅から田面がぬかるんでいたと推定できるものもありました。

森山東遺跡の水田の広がりについては、調査範囲が中勢バイパスの路線内に限られているため推定が難しいものの、北端が旧美濃屋川の付近、南端が隣接する太田遺跡で確認された旧河道の北岸付近だと考えられています。また、この水田の耕作に従事した人々の居住区は、調査区西方の微高地上や遺跡北方の丘陵裾に位置する宮ノ前遺跡ではないかと考えられています。（村木一弥）



水田遺構平面図（1：1,200）

遺物紹介⑭

太田遺跡出土の銅鐸形土製品

今回は、津市長岡町の太田遺跡から出土した銅鐸形土製品を紹介します。太田遺跡は国道23号中勢バイパス建設工事に伴い、昭和63年に三重県教育委員会によって発掘調査された遺跡で、この銅鐸形土製品をはじめとする太田遺跡の出土遺物は、三重県埋蔵文化財センター（多気郡明和町）に保管されています。

銅鐸形土製品は、文字どおり銅鐸を模倣した土製品です。太田遺跡の銅鐸形土製品は、高さが6.5cm、裾幅が7.3cm、欠けている鈕（吊り手）の部分をも復元したとしても10cmにも満たない小さなものです。この土製品には銅鐸のような模様は無く、飾耳は鰭に刻みを入れて表現されています。その目の数が一方は4つで、もう一方が5つと左右対称でないなど、この銅鐸形土製品は実物よりもかなり大雑把な作りなのですが、型持孔を模した小孔は実物と同じ位置にきちんとあけられています。また、この銅鐸形土製品は大溝（旧河道）から弥生時代後期～古墳時代前期の土器や木製品に混じって出土したことから、弥生時代後期のものと考えられています。

ところで、銅鐸は弥生時代に豊作を祈る祭祀に用いられていた青銅器です。初めは鳴らして音色を「聞く」ものだったのが、そのうちにだんだんと大型化して、「聞く」よりも飾って

「見る」ことへと祭祀での用途が変わっていったと考えられています。銅鐸形土製品は銅鐸の代用品だとは考えられていますが、それが作られた理由や実際にどのように用いられていたのかなどは、まだよくわかっていません。例えば、太田遺跡のものには鳴らして使っていたような痕はありませんでした。

また、津市では神戸、野田、高茶屋の3か所から銅鐸が出土しているのですが、銅鐸形土製品はまだ太田遺跡でしか出土していません。三重県でも太田遺跡を含め、鈴鹿市上箕田遺跡や松阪市堀町遺跡など、6つの遺跡で出土が確認されているだけで、今のところ銅鐸の出土例よりも少ないような状況です。

太田遺跡が位置する安濃川左岸には、前章「安濃津をゆく」「遺跡紹介」でも紹介したように納所遺跡や森山東遺跡、蔵田遺跡といった弥生時代の遺跡がたくさんあります。これらの遺跡では、水田跡や灌漑用の井堰、木製の農耕具など、稲作にかかわる遺構や遺物がたくさん見つかっています。まだ銅鐸こそ出土していませんが、太田遺跡から銅鐸形土製品が出土しているのですから、この周辺にも銅鐸祭祀の文化が浸透していたことは確かです。

銅鐸形土製品、銅鐸の代用品とはいうもののまだまだ謎の多い遺物です。（藤田充子）



銅鐸形土製品 写真提供：三重県埋蔵文化財センター



銅鐸の各部名称（高茶屋銅鐸1号鐸復元レプリカ）

埋文センターこの1年

今年度下半期は、おこし古墳で測量調査を実施したほか、普及面では1月から新たに、市役所本庁舎1階と津駅前ビル「アスト津」4階アストプラザで「文化財ロビー展」をはじめました。また、2月には市政ガイド「遺

跡探訪 安濃津をゆく（前編）」(ZTV) が放映されました。今後もこの様な活動を通して、市民のみなさんに津市の埋蔵文化財とその保護をご理解いただけるように努めていきたいと考えていますので、ご期待下さい。



おこし古墳測量調査



文化財ロビー展（アストプラザ）



「遺跡探訪 安濃津をゆく」撮影

平成13年度

- 4月19日《普及》出張講座（椋本小学校）〔芸濃町〕
- 20日《普及》出張講座（高野尾小学校）
- 24日《見学》神戸小学校遠足91名
- 26日《会議》三重県埋蔵文化財専門担当者会議〔於：明和町〕
- 27日《見学》片田小学校遠足69名
- 5月2日《普及》出張講座（育生小学校）
- 15日《普及》出張講座（楯形小学校）
- 21日《普及》出張講座（白塚小学校）
- 24日《普及》出張講座（大里小学校）
- 31日《普及》出張講座（安東小学校）
- 6月4日《普及》出張講座（修成小学校）
- 5日《研修指導》西郊中学校「総合的な学習」20名
- 27日《見学》家庭教育学級（一身田小）25名
- 29日《試掘》むつみが丘古墳試掘
- 7月2日《見学》家庭教育学級（育生小）20名

- 8月10日《会議》三重県埋蔵文化財専門担当者会議〔於：越野町〕
- 9月13日《見学》寿大学（白塚公民館）26名
- 13・14日《会議》公立埋文協東海北陸ブロック会議〔於：福井県〕
- 18日《見学》市政教室（八幡町北自治会）25名
- 10月21日《普及》埋蔵文化財体験講座10名
- 11月15日《会議》公立埋蔵文化財センター協議会研修会〔於：松阪市〕
- 18日《普及》埋蔵文化財体験講座 遺跡見学会8名
- 27日《会議》三重県埋蔵文化財専門担当者会議〔於：伊勢市〕
- 12月6日《見学》新町小学校校外学習69名
- 1月4日《普及》「文化財ロビー展」開設
- 1月7日《見学》三重大学留学生センター 8名
- 2月1～28日《普及》市政ガイド「遺跡探訪 安濃津をゆく」放映（ZTV）
- 12日《会議》三重県埋蔵文化財専門担当者会議〔於：明和町〕
- 30日《見学》村主公民館〔安濃町〕25名
- 3月7日《見学》市政教室（津商工会議所）30名
- 4・5日《試掘》高松院跡試掘

《編集後記》

近年、当センターは発掘調査件数こそ低迷していますが、「今がチャンス！」と学芸員は、懸案の報告書作成や資料調査、普及活動等に奮闘しています。

また、今号は「学校教育との連携」をテーマに学校サイドのご意見を伺いました。この企画にご賛同下さった安東小学校長、お忙しい中ご執筆下さった深見先生には深く感謝いたします。
(編集子)

発行日：2002. 3. 29

編集・発行：津市埋蔵文化財センター

〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：伊藤印刷株式会社